

伝馬町 遺跡

—近世飯田藩武家屋敷跡—

1988年 3月

下伊那教育会
飯田市教育委員会

伝馬町 遺跡

—近世飯田藩武家屋敷跡—

1988年 3月

序

下伊那教育会は百周年記念を迎えるに当り、記念事業の一環として旧別館を取り壊し、その跡地に新しい別館の建築と駐車場の拡張を計画致しました。

ところでこの地籍は、過去において縄文時代の土器片が表採されたこともあり、「伝馬町遺跡」の一角とみることもできます。一方、この跡地は、江戸時代中期の千人講騒動に関係の深い郡奉行黒須楠右衛門家縁の旧宅地であることなどから、別館建築の前に発掘調査を行ない、資料としてまとめることといたしました。

発掘調査の議がもちあがったのは、建築工事を二ヵ月後にひかえた昭和62年2月のことでした。急きょ教育会の考古学委員会をはじめ歴史委員会や地質委員会の先生方による発掘調査団を結成し、飯田市教育委員会のご支援をいただきながら準備を進めたのであります。

3月1日に発掘調査にはり、土曜日の午後と日曜日の終日にわたって、作業をくり返してきました。時節柄雪中作業を強いられたり、年度末という多忙な時期でもあったりして悪条件は重なりましたが、団員の精力的な参加と専門的な発掘技術の駆使とによって、きわめて短期間のうちに調査のはとんどを終ることができたのであります。

古い時期の土器類の出土は少なかったものの、近世飯田城下町における武家屋敷の遺構・遺物が明らかとなり、これがこの時期最初の発掘事例としての意義も大きく、飯田城跡調査結果とともに、今後の近世飯田城下町研究に資すことが大きいと思います。

この調査報告書は、以上の発掘調査の経緯と、それの整理・執筆の労作を経て刊行のはこびとなった次第であります。この間における団員各位のご盡力、ご協力に対し深く感謝を捧げる次第であります。

百周年の記念の年に、このような報告ができますことを心からよろこぶとともに、この事業に関係なされた皆様方のご指導、ご援助に対し厚く感謝を申し上げます。

昭和63年2月

下伊那教育会会长 吉澤芳人

例　　言

1. 本書は飯田市教育委員会が下伊那教育会に委託して実施した伝馬町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は昭和62年4月からの下伊那教育会館別館及び駐車場建設に先立つ、事前の緊急発掘調査のため、充分なる検討がなされず資料提供と問題提示の報告となっている。
3. 本遺跡の発掘調査は下伊那教育会の考古学委員会が中心になり、歴史委員会・地質委員会三者の協力に基づいて実施された。
4. 本書の執筆は三委員会でそれぞれ分担し、編集は考古学委員会が担当した。なお、分担は以下による。

I 1.(1)(2) 地質委員会	松島 信幸
(1) 考古学委員会	市瀬 洋吉
(2) 歴史委員会	山内 尚巳
(3) 考古学委員会	松沢 英男
II 1.2.3 考古学委員会	宮沢 恒之
III 1.2. 歴史委員会	片山 徹、市沢 英利、芦部 公一
IV 1. 歴史委員会	山内 尚巳
2. 考古学委員会	宮沢 恒之
まとめ 考古学委員会	宮沢 恒之
写真	井上 伸児
編集	片山 徹、市沢 英利
5. 山上遺物のうち、陶磁器類については、長野県埋蔵文化財センター原明芳、市川隆之調査研究員の指導を受けた。
6. 出土遺物・関係図面等は、飯田市仲之町下伊那教育会館参考館に展示保管されている。

目 次

序	
例 言	
I 環 境	
1 自然的環境	1
(1) 位 置	1
(2) 飯田市街地や仲之町の地形・地質	1
2 歴史的環境	4
(1) 考古学的立場から	4
(2) 歴史学的立場から	5
(3) 飯田市街地の考古学的調査	7
II 発掘調査の経過	
1 発掘調査に至る経過	11
2 調査組織	11
3 調査日誌	11
III 発掘調査の結果	
1 遺構と遺物	12
(1) 旧別館建物	12
(2) 旧別館下層遺構	
① 柱 碇 群	12
② かまど址	14
③ 右囲い遺構	14
④ 集 石 1	16
⑤ 土 壤 1	16
2 遺構外出上遺物	16
IV 考 察	
1 歴史学的所見	18
2 考古学的所見	21
V ま と め	23

挿 図 目 次

第1図 伝馬町遺跡周辺地形図	2
第2図 駐坂時代および掘時代初期における飯田城絵図	7
第3図 周辺遺跡分布図	9
第4図 旧別館建物礎石実測図	13
第5図 旧別館下層遺構全体図	14
第6図 柱礎群出土遺物実測図	15
第7図 かまど址・石開い遺構実測図	15
第8図 集石1実測図	15
第9図 土壇1実測図	15
第10図 石開い遺構・集石1・土壇1出土遺物実測図	17
第11図 遺構外出土遺物実測図	18
第12図 駐坂家時代の仲之町を中心とする武家屋敷図	19・20

図 版 目 次

図版1 遺跡近景（北より）、遺跡近景（東より）、グリット設定状況	
図版2 柱礎2、柱礎3、柱礎5、柱礎6、かまど址	
図版3 石開い遺構、土壇1、集石1、集石1底部木製品、発掘風景	
図版4 柱礎群出土灯明皿・壺、かまど址出土御深井釉碗、土壇1出土上瀬戸・美濃系磁器碗・灯明皿・青銅製取手・キセル、遺構外出土伊万里系蓋・古錢	

I 環 境

1. 自然的環境

(1) 位 置 (第1図)

調査地は飯田城の城下町として市街地化した“飯田段丘”上に位置している。城下町の発達した飯田段丘は駿越山(1,535)・駿空藏山(1,130)の山麓に広がり、北側を野底川、南側を飯田松川によって侵食されてできた段丘である。

市街地が発達する部分の段丘面は、一見して平坦なひと続きの地形面のように見えるが、段丘面の上はかなりの凹凸がある。飯田松川と野底川との間の段丘面を掘りこむ二つの谷によって3つの丘に分割されている。まず、谷川によって橋北地区の段丘と橋南地区の段丘が分かれている。伝馬町遺跡は橋北地区に入る。さらに、橋南地区は玉竜寺川によって、橋南地区主部と愛宕地区に分かれている。

調査地がある橋北地区の段丘の標高は、段丘の上端に近い桜町駅踏切で518.0m、大宮通りのロータリーで506.9m、段丘の末端部に近い飯田測候所で481.5mである。伝馬町遺跡付近は490m余前後であろう。

このように橋北地区の段丘は野底川の流路に沿って、その南西側に発達しており、北西から南東に向かって傾斜した扇状地開折段丘である。

(2) 飯田市街地や仲之町の地形・地質

飯田市の旧市街地が発達する段丘地形

飯田市街地は天竜川の西側に発達する“竜西段丘”に属し、木曾山脈から流れ出た飯田松川と野底川の侵食作用によってつくられた段丘上にある。段丘の南側が飯田松川の下削作用による段丘崖となっていて、岸の上に市街地があり、岸の下の郡地区は松川の氾濫原や沖積低地となっている。この段丘岸の比高は次のとおりである。城下グランド(436.7)と飯田城跡(約458)との比高が48.3m、羽場坂上(羽場二区509.9)と新久米路橋(約475)との比高が34.9mである。このことから、羽場地区の段丘崖の高さは35~40mあり、橋南地区では少し高さを増して40~50mの比高をもっている。

飯田市街地が発達する段丘面の北東縁は野底川の谷によって断たれている。野底川に面する段丘崖の比高は約10数mである。野底川は東堀で飯田松川に合流している。したがって、飯田城の城下町であった旧市街地は東堀・桜町・羽場を頂点とする三角形を示す。北東縁と南縁とが野底川と松川によって断たれており、山側の北西縁は桜町から羽場に至る飯田線の通過する



第1図 伝馬町遺跡周辺地形図 (1 : 25000)

位置が虚空蔵山の山麓部に広がっている扇状地との境界線にあたっている。

旧市街地はもともと一続きの扇状地として形成したものである。恐らく、10万年前ころの後期更新世初頭までは竜西から竜東にかけて盆地全体が平坦な扇状地によって埋積していたと推定される。10万年前から以後、天竜川とその支流の激しくなった侵食作用によって、一続きの扇状地が開析されて現在のような段丘地形が発達するようになった。当地域では、飯田松川と野底川による開析作用によって、かつての扇状地は分断され、川沿いにはたらく下刻作用によって段丘崖がつくられ、今のような扇状地開析段丘が出現した。

飯田市街地の段丘をつくる地質

段丘は2つの礫層と、最上部に重なる火山灰層からできている。最上部の火山灰層は飯田城二ノ丸跡で約3mの厚さを持つ。火山灰の給源は御岳火山で、その新期テフラ層を主体にしたものであり、約2万年前から4万年前の地層である。

火山灰層の下にある礫層が段丘礫層である。段丘礫層は花こう岩礫を主体とする礫層で、飯田松川または野底川によって運搬～堆積した礫層である。愛宕神社では3～4mの厚さを持ち、飯田城二ノ丸では4～5mの厚さを持つ。礫は白く新鮮で、風化が進んでいないので、崖上に突出した地層をつくっている。礫の大きさは20～30cm大を主とし、ときには1.5m大の巨礫も含んでいる。礫の間は粗い花こう岩質の砂によって充填されている。この礫は、支流が古い扇状地を侵食していくときの礫層で、飯田市街地の開析段丘をつくったときの礫層である。

飯田市街地の段丘の主体を占める礫層は段丘礫層の下にみられる。両者は不整合関係である。下位の礫層は“伊那層群”的一員で、その最上部にある“柳沢礫層”相当層である。古くから、通称“伊那層”と呼ばれている。伊那層は愛宕神社で30m余、飯田城址で40m余が露出しているものの、下限は不明であるから、飯田市付近では数10mから100mの厚さを有すると推定される。この礫層は鼎地区の低地部でもボーリングによって数m下に存在し、松川を越えた一色・名古熊段丘に連続している。つまり、10数万年より以前の中期更新世までは、飯田市街地から一色・名古熊まで一続きの扇状地が広く盆地を埋積していたのである。そのときの扇状地は天竜川に沿って、主として天竜川の堆積による礫層が広く分布していた。

伊那層は茶褐色を示し、花こう岩礫やホルンフェルス礫が全ぐさり状態に風化している。チャート礫のみが堅いままで残っている。礫種は天竜川の河床礫と同じようで、赤石山地から運ばれてきた緑色岩類やチャートを含んだり、駿訪方面から供給された安山岩礫が含まれている。礫は数cm大のものを主体とし、わずかに10cmから10数cmのものを含んでいる。少ないが薄い砂層もはまれている。

飯田市街地の段丘は“伊那層”によって構成されている。しかし、その礫層は段丘を作ったときの礫層でなく、段丘時代より一時代前の大扇状地時代のものである。伊那谷が段丘時代にはいると、松川や野底川が扇状地を侵食して扇状地開析段丘をつくってきた。川沿いで深く掘りこみ、扇状地は分断され、扇状地の上も削りこまれて何段もの段差をもつ複雑な段丘地形が形成されたのである。

遺跡周辺の地形

発掘調査では表層部のみ掘っただけで、地層断面を見るような調査はされていない。また、遺跡周辺は完全に宅地化しているため現地形を復元することも困難である。そのような現状であるが、当遺跡の地形上の立地状態を述べておく。

遺跡は野底川と谷川との間に半島状に突き出た橋北地区の南縁に位置している。谷川は段丘先端部の飯田測候所で40m掘り込んでおり、上流に向かって、順次浅くなり、めがね橋付近で

10m、吾妻町から東和町にかけてどんどん浅くなり、東野ではまったく掘りこみがはじまっている。伝馬町通りは橋北地区のほぼ中央部にあり、伝馬町より東側がより段丘状の地形を呈している。

遺跡のある仲之町は谷川と平行している。つまり、段丘面を縦に走る道路で、東に向かってわずかずつ下っていく。仲之町通りと谷川との間に馬場町通りがある。この道は、谷川に面する段丘崖の縁をめぐっている。馬場町通りと仲之町通りは平行しているものの、馬場町通りの方が1mから2m低くなっている。このわずかな崖線が遺跡のある屋敷の南側の境界となっている。このように、橋北地区は、仲之町と馬場町との2段の段丘面に分かれている。仲之町の北側を江戸町通りが平行して東に向かっている。江戸町通りの東側は江戸浜町となるが、江戸浜町から東栄町にかけては馬場町と同様に一段と低い段丘面である。

2. 歴史的環境

(1) 考古学的立場から

飯田市には、遺跡が多く、旧市内だけでも45遺跡ある。この遺跡の大部分が複合遺跡である。縄文時代の遺跡は35、弥生時代の遺跡16、古墳時代7、奈良・平安時代の遺跡6、中世の遺跡1が現在は確認されている。

旧飯田市内には1万年以前の旧石器時代の遺跡遺物を見ることができなかつたが、長船城跡の調査で、細石器刃石核が出土した。縄文時代早期では湯渡遺跡や、押洞遺跡などがあり押型文土器の破片がみつかっている。縄文時代中期（5000年前）になると、文化の華が一度に咲き誇るかのように正永寺原遺跡、権現堂前遺跡、押洞遺跡、大門町遺跡、追手町遺跡と山麓から台地先端にいたる広範囲の各地に、遺跡が分布するようになり遺物も多く見られるようになる。

次の水稻栽培を経済基盤とする弥生文化の下伊那への波及は縄文末期のことであり、美濃、尾張、三河方面から東漸したものと考えられている。弥生時代は前期・中期・後期と3区分されるのが通例であるが、旧飯田市内の代表的遺跡を見ると、正永寺原遺跡や権現堂前遺跡、さつみ遺跡、古屋垣外遺跡など後期の遺跡が多く見られる。

古墳時代になると、7遺跡が発見されている。正永寺原II号古墳、堤遺跡などがある。また、市街地では家屋があって遺跡は発見されなかつたが、飯田城下から鏡が発見され「集古十種」の古鏡図によって市内にも古墳があったことが確認された。

奈良・平安時代の遺跡としては旧市内6遺跡あるが、いずれも複合遺跡である。正永寺原遺跡・湯渡遺跡・権現堂前遺跡などがある。

また、近世では旧風越高校遺跡の風越窯跡が有名である。

(2) 歴史学的立場から（第2回）

① 現在の飯田市街地は、古代においては「倭名類聚鈔」所載の麻績(續)郷に属していた。中世になると郡戸莊飯田郷となった。この郡戸莊は、「吾妻鏡」文治2年（1186）3月12日の条に年貢木済の庄とみえている。文治3年、阿波の近藤六郎周家なる人物が、郡戸莊地頭に補せられ松原と称する場所に居館を置き、後に坂西と改姓して愛宕に飯坂城を築いたという説があるが定かでない。「諏訪御符礼之古書」の嘉暦3年（1328）の条や小山文書にみられる、觀応元年（1350）の「阿曾沼秀親所領注文」によると、飯田郷の鎌倉時代から室町時代初期の地頭は阿曾沼氏であったことが知られる。また、享徳元年（1452）、長禄2年（1458）の同書では、飯田郷は信濃国守小笠原氏配下の坂西康維が地頭として、諏訪上社神射山祭の頭役を勤めているし、天文2年（1533）には、京都醍醐寺理性院の嚴助が文永寺へ下向する途次に、飯田郷の坂西伊予守と弟民部少輔の居城を訪れたことが、「信州下向記」に記されている。これによつて、室町時代の中期以降の飯田郷地頭は、阿曾沼氏から坂西氏と変わり、これらによって飯田台地の開発や飯坂城（愛宕城）の建設が進行し、やがて飯坂城は拡張の必要にせまられ、東方の長船六本杉の地に移されたと考えられる。

なお、「飯田」の地名の文献上の初見は元応元年（1319）、僧宗昭覺如が三河を経て信濃に入り、飯田の僧寂円を訪ねた「常楽台主老衲一期記」の記事である。

戦国時代末期には、武田氏が伊那谷を支配し郡代として秋山信友を飯田城に置き、坂西氏は武田氏に従った。天正10年（1582）、織田信長の先鋒織田信忠は飯田城を陥し、信長は毛利秀頼に伊那郡を与え、これによって坂西氏も滅んだ。しかし、同年本能寺の変により毛利氏は急撃京都に帰り、かわって徳川家康配下の下条頼安、統いて同15年には菅沼定利が飯田城に入った。さらに、同18年徳川家康の関東移封とともに菅沼氏が関東に移ると、再び毛利秀頼が飯田に入り、伊那全郡を支配した。文禄2年（1593）秀頼が朝鮮の役の帰途死去すると、その聲京極高知が入城して跡を継いだ。

江戸時代になると、慶長5年（1600）京極氏は丹後の宮津（現京都府宮津市）に移り、下総古河（現茨城県古河市）から小笠原秀政が入り、同18年松本に移るまで在城した。その後数年間、飯田領は幕府領となり小笠原氏の預りとなつた。元和3年（1617）脇坂安元が伊予大洲（現愛媛県大洲市）から入り、寛文12年（1672）播磨竜野（現兵庫県竜野市）に移るまで55年間在城した。同年堀氏が下野烏山（現栃木県那須郡烏山町）から入り、以後明治維新まで12代約200年間にわたって在城した。

毛利・京極氏時代には兵農分離が進行し、武士は城下に居住することになり、城下町の整備が行われた。本町・番匠町・池田町・十王堂町・知久町・松尾町・田町・鍛冶町・大橋町などの商人町はこの時期に京風の碁盤目状の町並となつた。毛利氏時代には、三州街道に伝馬制が置かれた。小笠原氏時代、城下は一時さびれたといふが、町に活気をもたらしたのは脇坂安元

であった。桜町や伝馬町を作り伝馬制度を整備すると同時に、中馬活動がはじまり町内が繁盛した。また、城の惣堀（外堀）を構え、町内や近郷の寺院を町周辺部に集めて防備につとめた。堀氏時代は二万石の城下町となったが、中馬活動のいっそうの盛行とあいまって、商業都市や宿場としても活気のある町であった。

② 江戸時代の飯田城下町は、松川・谷川・野底川にはさまれた舌状台地の先端部を中心にして立地している。

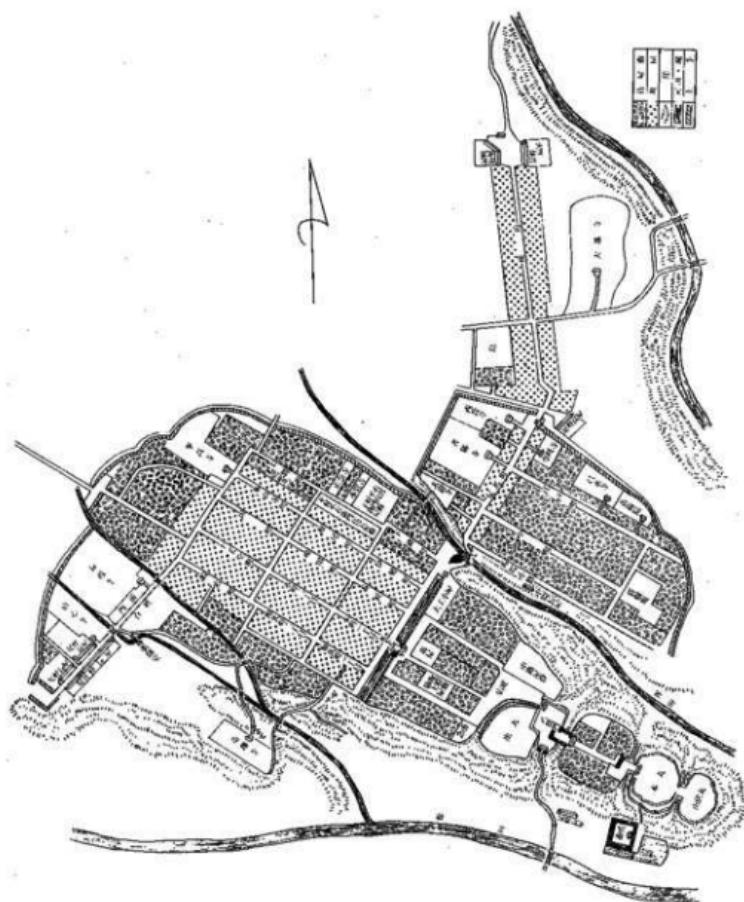
松川と谷川の間の台地は、先端から堀端（現銀座通り）までが山伏丸・本丸をはじめとする藩の中核部と重臣の武家屋敷があり、堀端をはさんで北に向かって知久町・鋸治町・木町・上王堂町・番匠町・池田町・田町・伊勢町・松尾町・峯高寺町などの町人町、それに武家屋敷のある下荒町・上荒町があった。荒町には伊那郡の幕府領の一部を御預所として統治する、代官千村氏の陣屋や手代屋敷のあることが注目される。千村氏は美濃久々利（現岐阜県可児郡可児町）に領地を与えられながら、伊那郡の代官でもあった特殊な存在であった。

町人町の周囲には、それを完全に包囲する形で武家屋敷が並び、箕瀬には足軽町もあった。さらにその周辺には、龍翔寺・柏心寺・長源寺・峯高寺・真光寺・正念寺・本覚寺が配置されている。

谷川と野底川の間の台地には、南北に馬場町・仲之町・江戸町、東西に伝馬町・破魔射場があり、伝馬町の町屋以外には、武家屋敷が整然と並んでいる。この周辺には、東に新樹庵、北に黄梅院・昌永寺・恵照寺、西は町屋の並ぶ伝馬町をへだてて西教寺・善勝寺・来迎寺があり、南は谷川に下る傾斜地となっている。なお、北から下って来た三州街道は、野底川を渡って桜町の木戸から城下に入り、桜町通りの舟形、伝馬町を経て谷川を渡り、堀端を縦貫している。

仲之町は、馬場町と江戸町の中間にあるため、初めは仲之小路と呼ばれたが後に仲之町となつたといわれるよう、両町に比較して道幅が狭かったと思われる。馬場町は藩の馬場があつたことによる町名である。谷川に面した傾斜地には漆や煙草を栽培したという。江戸町は江戸詰めの藩士の屋敷があつたことによる町名である。

飯田城下は、江戸時代において中馬活動の拠点となつたころから、商業都市として大きな発展をとげてきたが、仲之町周辺は依然として武家屋敷の町として機能してきたのである。飯田は、古くから大火が多く、江戸時代にも度重なる火災に見舞われている。特に昭和22年の大火は市街の8割を焼いたが、仲之町周辺はその難をまぬがれて、江戸時代の面影を残してきた貴重な町並であった。



第2図 脇板時代および堀時代初期における飯田城跡図

(3) 飯田市街地の考古学的調査（第3図）

伝馬町遺跡の近辺にはどのような遺跡が存在するだろうか。今までに調査されている、大門町遺跡、旧風越高校遺跡、飯田城址について、その概要にふれておきたい。（大門町遺跡、旧風越高校遺跡については各報告書、飯田城址については、中途の情報文献より引用させて頂いた。）

① 大門町遺跡（第3図B）

この遺跡は、飯田市大門町121番地を中心とする地域にある。昭和48年に天理教北飯田分教会で車庫建設中に多量の土器が出土して、はじめて遺跡であることがわかった。調査は飯田高校考古学研究会が中心になって行われている。縄文中期中葉の勝坂式が主であるが、比較的小伊那に少ない中期前半の上器が多くみられるこも特色である。調査地域内で検出された住居址は一つだけで、それも3分の1程度調査できただけであるが、この住居址は直径約4mの円形プランと推定される。柱穴は不明。住居址のはば中央と思われるところに炉があり、花こう岩7個をもってつくられた石匂がで、炉石は多く焼けていた。遺物は住居址のはば中央の床面に集中している。出土した土器の中には、工事中に掘り上げられ、出土状況の明らかでないものも含まれるが、八ヶ岳南麓地方の編年でいう藤内式・井戸尻式にあたるもののが確認された。1号住居址の主体となる土器は勝坂式のもので、特に文様構成が藤内式土器に共通したものが多い。この土器と平出3類Aにあたる土器が伴出したことも注目されている。

② 旧風越高校遺跡（第3図D・E）

飯田市大王路に所在し、旧飯田風越高校跡地にある。弥生後期の遺跡と江戸時代末期の風越窯址として知られている。昭和52年飯田警察署建設に伴う立合調査で弥生後期住居址1、柱列址1、近世建物址1、上塙3（時代不明）が検出されているが、遺跡の大半は東を流れる野底川の氾濫によって切りとられていることが確かめられた。風越窯址は、この遺跡の東側部分、野底川の浸蝕崖に構築されている。風越窯址については、昭和31年に人渢和夫先生によって1号窯が確認され、52年には遠那真周先生によって1号窯の北側にある2号窯の発掘調査が行われ、54年に創造の森建設に伴い、佐藤透信先生を团长とする調査団によって、1号窯の確認調査が行われた。風越窯は嘉永年間、美濃から陶工を招いて磁器を焼かせたもので、飯田藩主堀親義のお庭焼・風越焼として知られている。わずか5年で廃止となつたが、その後も磁器を焼いたと伝えられており、調査によって、鉢・生焼のスリ鉢の破片などが検出されてそれを裏付けた。風越窯は連房式登窯の本業窯で30度を越す急斜面を利用して構築されている。遺物は完形品こそないが、染付けの磁器、青磁、白磁があり、優品が焼かれたことを示す好資料を得ている。

③ 飯田城址（第3図I）

市美術博物館の建設に伴い、61年9月から二の丸跡の発掘調査が行われ、統いて本丸跡の発掘が行われた。詳しいことは報告書を待たねばならないが、今までの経過の中で発表された文献から引用させて頂く。

飯田城は江戸時代飯田藩の小笠原・脇坂・堀氏の居城である。二の丸には、東西に貫く大通りと両側に重臣の屋敷があったと言われるが、発掘によって、大通りの跡、屋敷の礎石、柱穴、石積みの水路、井戸、池、鍛冶施設、貯蔵施設、ごみ捨ての大穴などが発見された。出土品も多く、陶磁器、素焼きの皿、焼塩壺、すずり、石臼、キセル、かんざし、刀、漆塗りの椀、焼



第3図 周辺遺跡分布図

(1 : 10,000)
(遺跡範囲は推定である。)

A…宮ノ上遺跡 B…大門町遺跡 C…大雄寺付近遺跡
D…旧風越高校遺跡 E…風越窯址 F…浜井場遺跡 G…魯勝寺裏遺跡
H…伝馬町遺跡(発掘地点) I…飯田城跡 J…追手町遺跡
K…梅南北遺跡 L…箕瀬A遺跡 M…畠町遺跡 N…洞遺跡

物の玩具、碁石など様々な生活用具の他に、魚の骨やサザエの貝殻など、当時の食生活を物語る遺物も発見されている。陶磁器には、伊万里、瀬戸、美濃焼が多く、中国・朝鮮産の青磁・染付・地元産の風越焼、富田焼もみられる。また、中世の空堀が2本見つかり、中世の住居址と考えられる方形の堅穴が約60軒も検出された。当地方では初めての発見である。

文 献

- 1956 大沢和夫「風越窯遺物発掘記」『伊那』1956-8
1975 飯田高校考古学研究会「飯田市大門町遺跡調査報告」『下伊那考古学会会誌Ⅱ』下伊那考古学会
1979 下伊那歴史考古学研究所『飯田風越窯址』
1979 飯田市教育委員会『風越高校・風越窯址』
1986 飯田市教育委員会『飯田城址発掘調査見学資料』

II 発掘調査の経過

1. 調査に至る経過

別館改築は、地域教育の拠点としての下伊那教育会館整備事業の中で構想され、教育会100周年記念の目玉事業でもあった。自動車で乗りつける多くの人達の諸会合の場とするためには、民家造りの別館を会議場風に改める必要がある。当然のこととして建物基盤の掘削整備工事が付随する。近世武家屋敷跡の地業破壊以前に、埋蔵文化財としての武家屋敷跡の調査を行なうべきであるとする提案が、考古学委員会よりなされ、改築工事前に緊急発掘調査を行うことが、教育会代議員会で決定された。

- 62・2・21 考古学委員会で、「下伊那教育会別館地籍発掘について」
1. 発掘調査理由
2. 調査手順 3. 調査組織 4. 調査日程 5. 予算資料 6. その他 等々、代議員会提案資料について検討。
- 2・23 代議員会で発掘調査実施を決定する。
- 2・24 県教委埋蔵文化財担当芦部公一指導主事をまじえ、教育会代表・考古学委員会代表とで、調査手順・組織などにつき打合せを行う。
- 2・26 文化財保護法にもとづき、飯田市教委との保護協議・諸届出書類の提出・覚書の交換をする。
- 2・28 組織・分担・協力依頼・資材調達等調査事前の打合せを行なう。
- 事前協議等の結果確認された事項 1. T工事主体者下伊那教育会 2. 調査主体者飯田市教育委員会 3. 調査担当教育会関係委員会からなる調査団 4. 調査期間 3月1日～3月31日 5. 経費は工事原因者負担 6. 埋蔵文化財の所有権は飯田市教委、保管活用は下伊那教育会が責任をもつ。

2. 調査組織

团长 吉沢芳人、副团长 久保田武彦・中井 博・西川昭一、会計 玉置俊通、庶務 石川正臣、調査担当者 宮沢恒之、調査員 考古学委員会松村全二外7名・歴史委員会今牧 久外10名・地質委員会松島信幸外8名・井上伸児 以上33名。

3. 調査の経過

- 62・3・1 結団・開始式、諸連絡に統いて作業開始。グリット設定、庭石等の計測、写真撮り、

- 旧別館主屋範囲を中心に掘り下げを行う。旧別館取壌しと整地に伴う瓦・ガラス・壁材、整地用砂利などが20cmほど堆積しており、作業ははかどらない。旧別館の礎石・栗石が散在する。雪が激しく舞いジョレンで削ぐ地目が観察しづらい。
- 62・3・2 重機で整地砂利など堆積物を排除する。旧別館玄関奥に一畳敷分ほどのムロ跡らしい掘込みが見つかる。埋土のはぎとりをすすめる。
- 3・7 全面の掘り下げをすすめる。柱礎の栗石・集石・旧別館主屋北西縁にそう暗渠排水とその掘込みが検出される。陶磁器類・金属器類の遺物があるが、近世から明治初期が多い。
- 3・8 南東隅に土壇、東・南側に踏み固め、ロームをまじえたつき固めの箇所やこれを柱礎が切る所などあり、地業は3時期にわたって行なわれたらしいことを確認し、上層からⅢ・Ⅱ・Ⅰ期とする。
- 3・12 北西隅に火廻・水場落し口がある。柱礎・栗石・集石・土壇などと共に計測、写真撮影終了。数グリットでロームまで掘り下げるが、近世以前の遺構は認められない。
- 8・18 駐車場舗装に伴う庫の礎石調査。今回の発掘調査を終了。遺物整理・報告書作成作業開始。

III 発掘調査の結果

1. 遺構と遺物

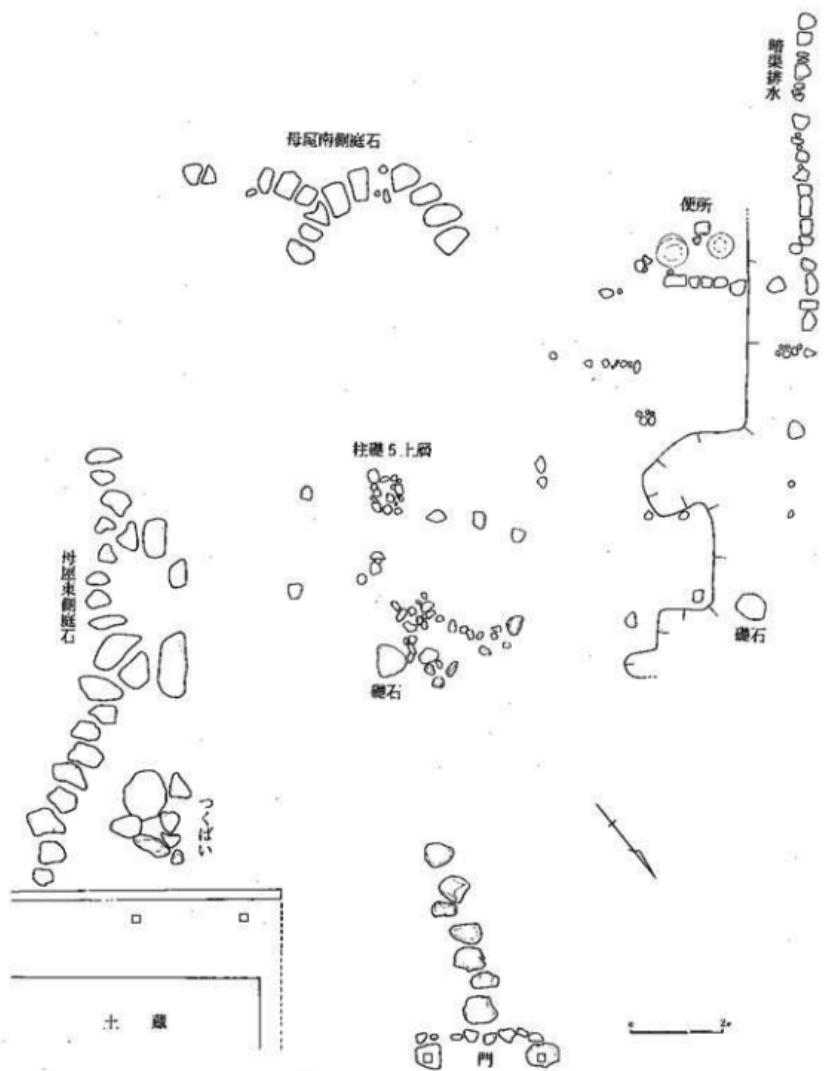
(1) 旧別館建物 一Ⅲ期一 (第4図)

旧別館は、昭和21年に黒須家から購入された建物である。建物は住宅・土蔵・門・塀・中庭などからなる。うち、住宅は明治の中頃に山本地区の農家を移築したものといわれ、土蔵・門・塀・中庭は黒須氏武家屋敷の頃のものと伝えられている。住宅の創建年代は不明であるが、江戸時代までさかのばる可能性がある。

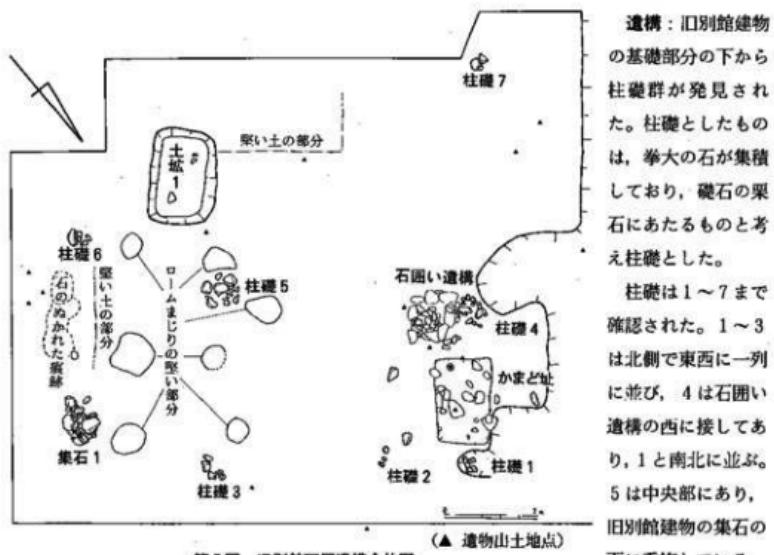
今回の調査は、旧別館の建物が取り壌された段階から始められ、まず、旧別館の基礎部分を確認した。北側に礎石が2箇確認され、中央部に礎石に関わると考えられる集石がある。西側にトイレと暗渠排水がある。暗渠排水は石組みとそれを埋没するための掘込みがあり、湯殿・勝手方向に伸びている。

(2) 旧別館下層遺構 一Ⅱ・Ⅰ期一

① 柱礎群 (第5図・6図、図版2・4)



第4図 旧別館建物礎石実測図



第5図 旧別館下層遺構全体図

また、3と南北に並ぶ。6は東に離れており、7は旧別館建物便所に接している。

柱礎群検出面において、50~60cmで円形のロームまじりの堅い土の部分が、柱礎3・5・6付近にみられた。また、東庭、南庭に面して堅い土の部分も確認されている。

柱礎群の検出、調査では陶磁器片などの遺物が点々と出土している。

遺物：幕末前の在地産とみられる素焼きの灯明皿（1・2）がある。伊万里系磁器では碗（8）が出土している。瀬戸・美濃系の陶器では16世紀～17世紀の銅緑釉皿（3）、16世紀後半～17世紀初にかけての大窯期の灰釉皿（5）、17世紀前半の輪はげ皿（4）、志野皿（6・7）、さらに時期不明の盃（9）が出土している。10・11の碗、12の皿は19世紀以降の瀬戸・美濃系陶器である。

② かまと址（第7図・10図、図版2・4）

遺構：別館の勝手奥六畳間下付近から検出した。検出時は、黒褐色土層が黒ずんでおり、これを掘り下げるに四角柱状の石が倒壊した状態にあり、石柱芯と判断された。また、底面には炭・焼上が認められ、かまと址と判断した。内部から陶器が出土している。

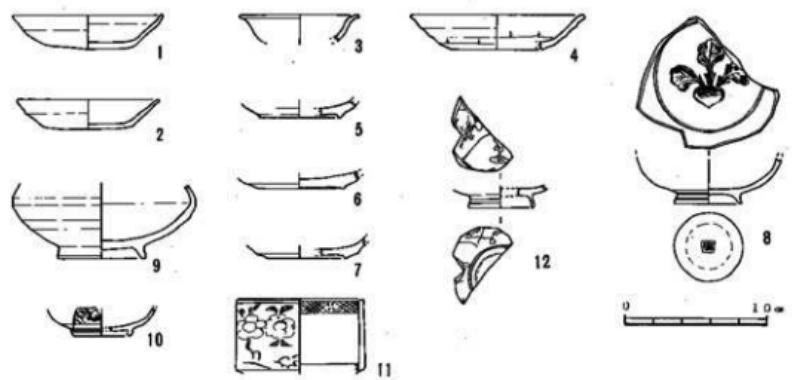
遺物：1は18世紀の京焼系陶器碗、2は17世紀の瀬戸・美濃系鉄釉碗、5も同御深井釉の碗である。

③ 石囲い遺構（第7図・10図、図版3）

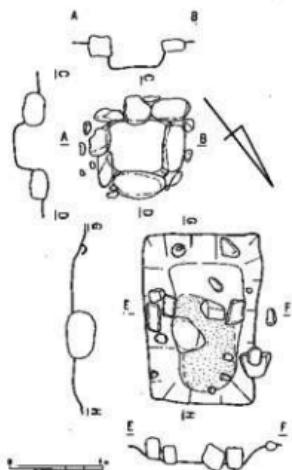
遺構：かまと址の南に接するようにあり、平面を持つ横長の石を方形に組み合わせてある。

遺構：旧別館建物の基礎部分の下から柱礎群が発見された。柱礎としたものは、拳大の石が集積しており、礎石の栗石にあたるものと考え柱礎とした。

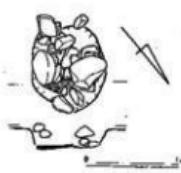
柱礎は1～7まで確認された。1～3は北側で東西に一列に並び、4は石囲い遺構の西に接してあり、1と南北に並ぶ。5は中央部にあり、旧別館建物の集石の下に重複している。



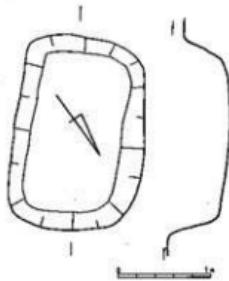
第6図 柱礎群出土遺物実測図 (1:4)



第7図 かまど址・石囲い遺構実測図
(1:60)



第8図 集石1実測図
(1:60)



第9図 土壇1実測図 (1:60)

石開いの内径は60cmほどで、内部には細かな砂が堆積しており、水の使用と関係ある遺構ととらえられる。遺構上面から陶磁器が出上している。

遺物：3は19世紀以降の瀬戸・美濃系陶器皿。6は産地不明の土瓶の底部で、幕末以降のものと考えられる。

④ 集石1（第8図・10図、図版3）

遺構：柱礎3の東に拳大～人頭大の石がかたまって発見され、集石1とした。集石を取り除くと、円形の木製品が置かれていた。木製品が残っていたことから湿気が多かった事が想像され、水にかかる施設かとも考えられたが、水が流れた形跡は確認できなかった。遺物は、陶磁器片が一点出土している。

遺物：17世紀代の鉄軸碗（51）である。

⑤ 土壙1（第9図・10図、図版3・4）

遺構：柱礎5・6の南で黒褐色土にロームまじりの黄褐色土が落ち込んでいるところから発見した。短径1m、長径2m、深さ80cmの長方形をなし、覆土の状況から人為的な埋め戻しがされたものととらえられる。土壙内より、角釘・瓦片・金屬片・陶磁器片が出土した。廃棄物捨て場と考えられる。

遺物：伊万里系の磁器丸皿（4）、瀬戸・美濃系磁器皿（7）碗（8）や産地は不明であるが幕末以降とみられる灯明皿（9～11）、素焼鉢（12）が出上している。

青銅製品では、キセルの吸い口（13）、管（14）、襷の取手（15）がある。

鉄製品には、性格不明のもの（16・17）のほか角釘（18～46）がある。角釘は1～2寸の中にはほとんどがおさまり、いずれも鍛造している。使用によって曲がったり、板材がさびついているものもみられる。

この他、焼けてタールが付着した瓦片（47～49）、同じくタールの付着した櫛（50）なども出土している。

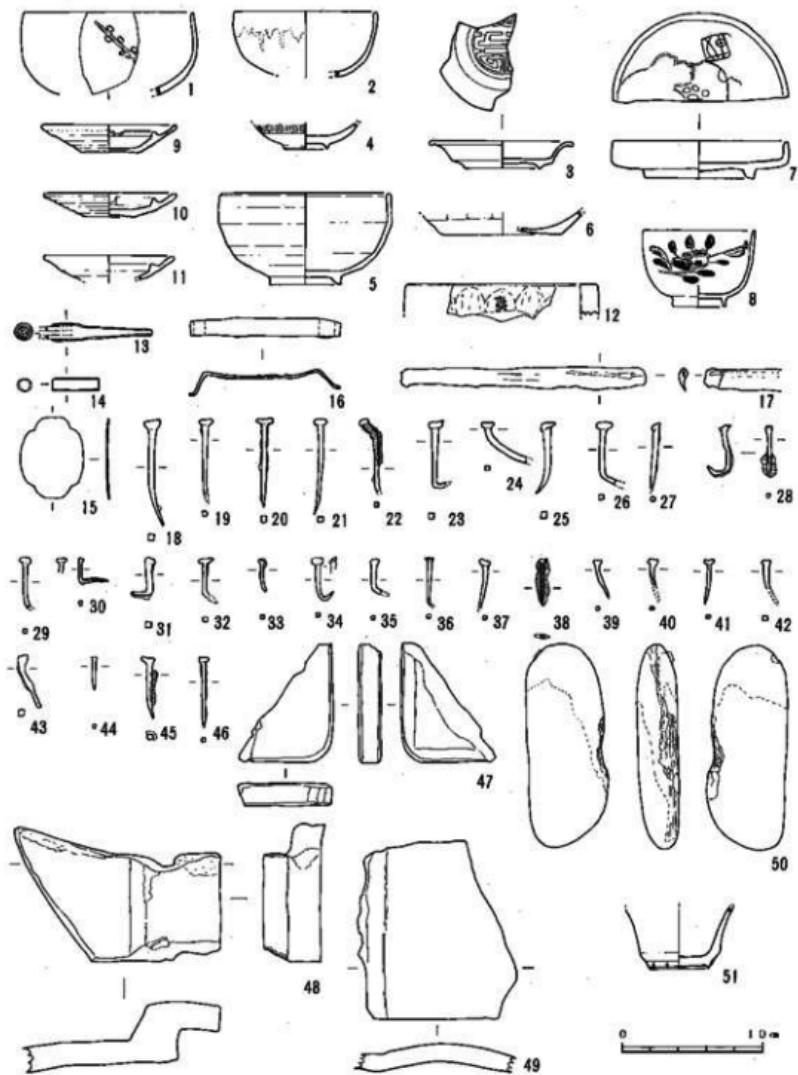
2. 遺構外出土遺物（第11図、図版4）

瀬戸・美濃系陶器では、17世紀前半の輪はげ皿（1～3）・天目茶碗（4）、16～17世紀人窓期の灰釉皿（5・6）・御深井輪の皿（8）、18世紀末～19世紀の波紙手の碗（7）がある。

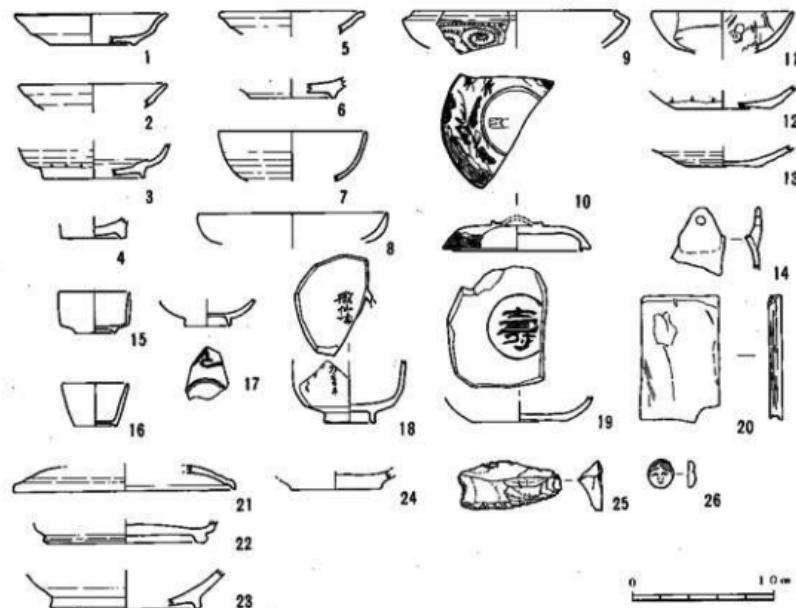
磁器では、伊万里系の鉢（9）・蓋（10）・碗（11）がある。瀬戸・美濃系では、杯（15・16）・碗（17・18）・皿（19）があり、19世紀以降のものである。

幕末以後の陶製土瓶（12～14）、陶製人形（26）も出土している。また、砥石（20）・角釘・古錢（寛永通宝）も出土している。

この他、繩文時代中期後半の上器片や石器（25）、平安時代の須恵器蓋（21）・杯（22）・壺（23）、土師器片（24）などが出土している。



第10図 かまど址(1.2.5) 石囲い遺構(3.6) 土壌1(4.7~60) 集石1(51) 出土遺物実測図(1:4)



第11図 遺構外出土遺物実測図（1：1）

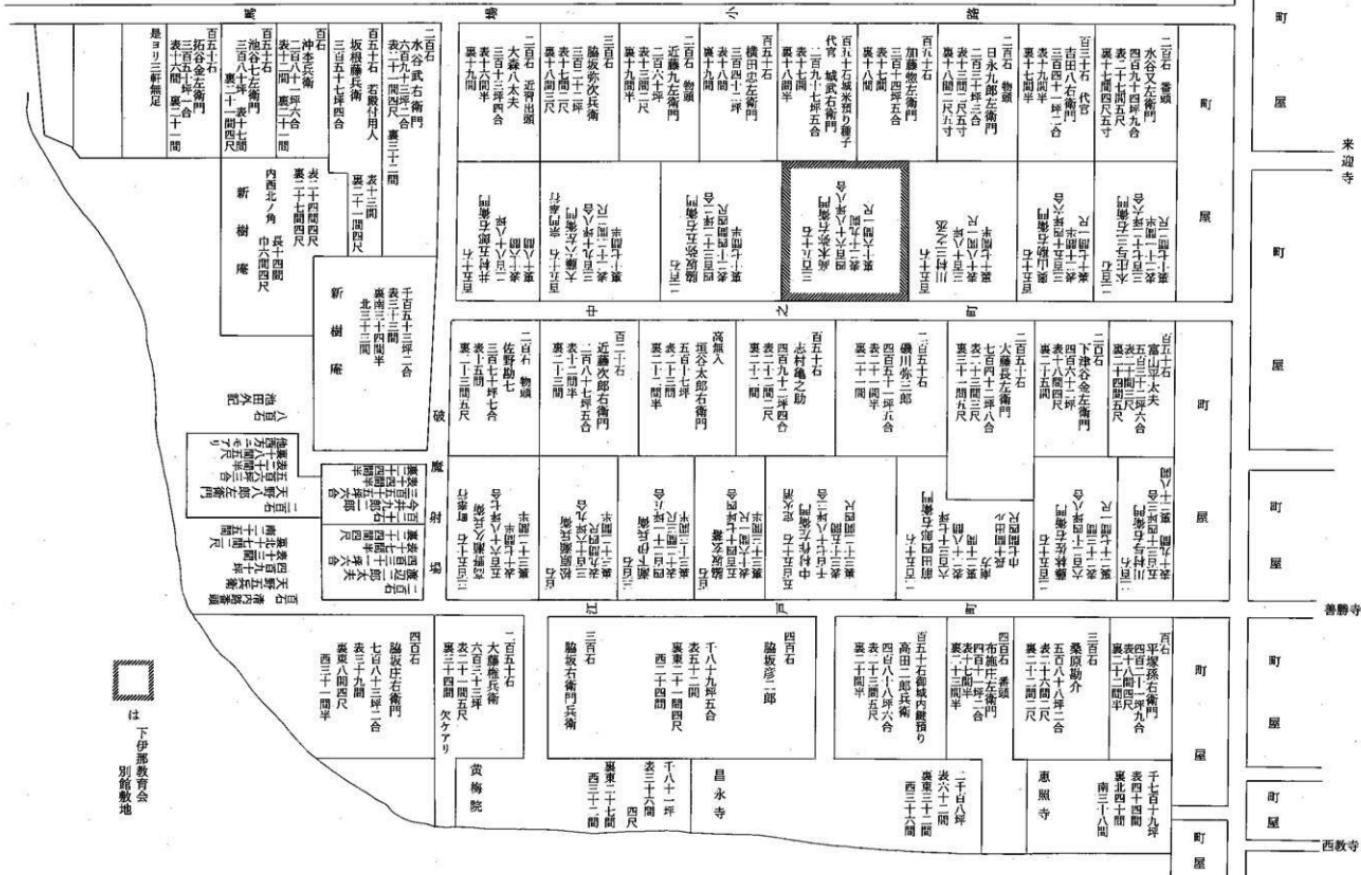
IV 考 察

1. 歴史学的所見 (第12図)

江戸時代における飯田城下町の絵地図や屋敷図類は、脇坂家時代以降のものがある。これらには、町割のなかに屋敷割りがなされ、屋敷ごとに家臣名、知行高、屋敷の表口と裏口の間数・坪数、一部の家臣については職階も記されている。また、その後において、堀家時代の家臣名のみが併記されている。(いずれも成立年次は不明)このほかにも、宝曆2年(1752)、寛政9年(1797)、天保2年(1831)の飯田十三町の町人町の家並帳があり、町人一軒ごとに屋号と居住者を記録している。

前記の如く、江戸時代の仲之町・馬場町・江戸町・破魔射場一帯は、飯田城下では最大の武家屋敷団地である。脇坂家時代の一時期についてみると、北側にあたる江戸町方面の恵照寺・昌永寺・黄梅院の並ぶ内側に藩主脇坂氏の一族縁者であろう脇坂彦二郎(400石)、脇坂右衛門

第12図 脇坂家時代の仲之町を中心とする武家屋敷図 (下伊那教育会所蔵絵地図より作成)



兵衛（300石）、脇坂庄右衛門（400石）、東側端の新樹庵あたりには、江戸家老池田外記（800石）の屋敷が配置されているのが目立つ。脇坂姓の家臣の多くは本丸近くに配置されているが、この一帯の武家屋敷周辺部にも脇坂氏が配されていることにより、家臣統治の意図がうかがわれる。脇坂姓の家臣の拝領高は他に比べて多くなっている。

堀家時代になっても、屋敷割の変更はなかったと思われるが、脇坂家時代に比較して、家臣名の記入もでないとすれば、所々に空屋が存在する。これは、脇坂氏所領高55,000石、堀氏所領高20,000石の差から、堀氏の家臣数が脇坂氏より少なかったことによるものと推測される。堀家時代の屋敷図には、家臣名のみで、拝領高や職階は記入されていない。

仲之町には、道の北側に8軒、南側に7軒分の武家屋敷があった。脇坂家時代には知行高150～350石の家臣達が、290坪～740坪の屋敷を構えていたのである。

今回発掘調査が行われた教育会館別館敷地は、脇坂家時代に高木佐右衛門の屋敷で、表29間裏16間1尺、坪数468坪8合となっており、現別館敷地面積1696.24m²とほぼ近い面積に相当している。また、堀家時代の一時期には、高木儀左衛門や黒沢（黒須力）伊太郎の屋敷となっていたこともあるが、両氏とも分限帳などによっても、身分格は不詳である。続いて幕末期になると年次は不明であるが、黒須家の屋敷となっている。黒須家は、飯田藩堀家初代親昌に従って烏山から来飯した家柄で、黒須右衛門は、宝暦期に郡奉行として藩財政危機切りぬけのための千人講を企画した人物として著名である。黒須家が仲之町に屋敷を与えられた時期は不明であるが、安政5年（1858）の堀親義の分限帳にある黒須喜一郎は、御給人として100石を賜わり仲之町に屋敷があった。当時の屋敷地は465坪6合2勺、建物は42坪余と記されている。さらに、明治23年（1890）ごろの家並縁では、黒須藤三郎の屋敷となっていた。江戸時代、この屋敷地はごく普通の中級の武家屋敷であったといえる。

2. 考古学的所見

調査結果については前項にふれた通りであるが、ここでは上層から下層にかけて3時期に分られた状況を整理しておきたい。

(1) Ⅲ期に開闢して

最上層に当たるⅢ期前面旧別館地業では、旧別館撤去後の整理により、一部を除きかなり搅乱された状態で、加えて整地用に搬入された砂利層が20cmほども堆積していた。しかしながら、ここが屋敷地とされた17世紀以降では、屋敷構え等に関する情報量は最も濃いはずであり、これに関しては「下伊那教育会七十年史」を参照されたい。

Ⅱ期との関連でみれば、移築に際して柱礎を生かしながら東・南側へ1間ほどずつ拡張し、それに合わせて庭石を移動したり、主屋西外側へ暗渠排水や玄関へ地下室を設けていたことがわかる。なお、南東隅へは移築地業の折りと思われる廃棄物捨場が掘られている。

(2) II期に関連して

近世武家屋敷の主屋の痕跡が比較的窺える時期に当たる。III期玄関より1間ないしは1間半奥に、町通りに併行する柱間2間（約4m）の栗石づめ柱礎がある。式台基礎であろうか。これの奥には柱間2m弱を測る栗石・締め固めた赤土混りの堅い地業があり、柱礎と考えられる。また、III期東側廊下の内側にかかる、栗石・庭石抜き取り痕・タタキ状の固めた土間が、さらにこのタタキ状の固めは、III期南側廊下の内側にかかる検出されている。一方、南西隅の便所の便竈は、II期所産の焼物であり、これら主屋外周囲の状況から、この内側にII期主屋が構えられたと考えてよい。そうすると、ほぼ表5間・奥行4間でこれに南西隅便所と、東北隅栗石に関連して張り出しを持つ配置で、正面から左側に接客用の、おそらくは書院付きを含めて2間、右側に台所とそれに関連する1間が、またその奥と接客用の間通りの間に、家人の日常の間が2・3設けられる、といった主屋構造ではなかったかと推測される。

(3) I期に関連して

I期に関しては、石柱芯カマドとその南側近くで、方形石囲の水場落し口が確認されるにとどまった。ただしこれは、後のII・III期を通じ台所の位置を固定したことを示していること、火處と水場、つまり台所の広さを示唆する点は重要である。確認されたカマドと落し口を囲む空間は、4坪より広いことは確実である。この台所の位置からみて、少なくともII・III期の主屋構造の基本型は、すでにこのI期にでき上がっていたことが了解できる。

以上、発掘調査の成果から見た建物基礎にもとづく主屋構造のあり方についてふれてきた。調査範囲に関連し、近世武家屋敷の全体像をつかむまでには至らなかったが、安政5年の分限帳に、黒須喜一郎建物42坪とあるという。屋敷地460余坪とすると、建物のない空間が実は10分の9以上となる。庭園部分を差し引いても、かなり広い土地が残ることになる。自給菜園であった可能性を指摘しておきたい。

ところで、発掘に先立つていくつかの仮定や前提について検討した。

主たる点は、近世城下町は、城を中心とした町割にもとづき、特殊な事情が生じない限り、厳密な屋敷割や屋敷構えが維持されていたのではないか、ということにあった。これは、文献資料を扱った前項でも述べているように、脇坂時代の高木氏屋敷地と幕末黒須氏屋敷地面積が、ほぼ同じであることから了解できる。また、仮に主屋間取りがささいな点で変更されたとしても、基本的には今回調査で発見されている遺物類から、17世紀の前半より、つまり、飯田城下町の整備がなされる脇坂時代以降、その全体像は変更されることなく、継承されてきたと見てよいのではなかろうか。

旧黒須家跡で見れば、教育会購入時の図面に示される屋敷構え——仲之町に面して塀・中央に門・左に土蔵・屋敷地中央に主屋・最奥に庫・主屋と土蔵に囲まれる所から東側に庭・主屋西中央に井戸・ことによれば、井戸を中心として仲之町通り側に奉公人の建物等が配置される——

は、発掘結果にみられる各期を通して固定された住居専用空間——玄関・台所・接客用の間。日常生活の間——からなる主屋を中核として、近世武家屋敷が構造化されていたと考えられる。これを、固定化された主屋構造として認めるならば、建物は自前のものでなく、官給貸与の可能性が高い。

本回調査対象範囲が、武家屋敷のうちの主屋に相当する部分に終始した、ということもあり、殊に年代決定に資する出土遺物の発見が少なかった。また、ある種の規制が強かったと思われる主屋跡ということも関連して、これの改変にかかわる基礎地業にさしたる変化を認めることはできなかった。遺物は主屋から離れた、たとえば、井戸周辺などに設けた不用廃棄物処理場に投棄されるものが多く、また、構築物のない空間こそ、ことによれば自家菜園の痕跡が見られたのではないか。そういうた、主屋をさらにとりまく屋敷構え全体をとらえる考古学的作業は残されたままである。今後敷地内の現状変更がなされるとすれば、機会を得たいと思う。

V まとめ

別館改築に伴う近世武家屋敷跡の発掘調査に先立ち、これを主導した考古学委員会としていくつかの課題をめぐる論議がなされた。中心となった論点は、「なぜ発掘調査をするのか」ということを、調査担当者としての下伊那教育会自身が、明確にしておく必要がある、ということにあった。

文化財保護法では文化財を『国民共有の財産』と規定し、だからこそ『国民は等しく文化財のもたらす恩恵を享受する権利を有する』としている。肩代りを張らずに、東大寺や平等院へ修学旅行に山かける引率事由を思い浮かべればよい。法にもとづくサービス側は、東大寺や平等院が今日ある存在理由を、感情をこめた追体験や見通しやすい姿に整備し、訪れた者達に還元する。そのための保護・活用の方策を確立していくことがある。

コンクリートで固めた新装別館の前へ、「旧飯田藩士黒須家宅跡」と立札をしたところで、近世武家屋敷跡の活用はどだい無理な話しというものである。

ところで、別館敷地一帯は「伝馬町遺跡」と呼ばれる埋蔵文化財包蔵地であるばかりか、近世飯田城下町の一画をなした武家屋敷跡でもある。たまたま、この地に近世末期に居宅を与えられたのが黒須氏であったこと、堀氏系類の藩士としての職掌、下人講験動にかかわった楠右衛門等について窺える文献資料は残るもの、ここに屋敷構えや、ここに寝起きした黒須家の人々のあり様を見ようとするには、いかにも資料不足といわねばならない。ただわずかに、「嘉永四年正月改 黒須家年中行事記」「天保九年改七月盆例式覚 黒須姓」に記された行事覚で、近世飯田城下における武士階級のしきたりを垣間見るにとどまらざるを得ない。記録のもつ重要性を認めつつ、同時にこれの示す限界を乗り越える手立てが必要となろう。

61年秋、飯田城二の丸跡発掘調査が飯田市教委によって実施された。ここでは、記録にとど

めない構造物とか道具類など、つまり、ある期間そこに位置づいた人々の活動を裏づける具体的な資料提示がなされて注目されている。たとえば、 $2 \times 7\text{m}$ 方形の掘込みがあり、柱穴跡をもつことから、上屋を架けた建物であったこと、また、銭・鎌・鉢が出土し、これらを用いるか収納する場であったことがわかる。性格不明の構造物ながら、これが、二の丸という城の中枢部に位置づき欠くべからざるもの一つとして存在したにもかかわらず、文献には記載されることはなかった。「泉州伊織」刻印をした径4.5丈6.5cmほどの食卓塙づくり容器が発掘されているが、これから塙の流通ばかりか焼塙製法・常用量やことによれば用い方等々、とうてい文献資料では追い切れない事実の提示が、発掘という考古学的な手法によってなされた事例といつてよい。

文化財の活用をはかるうとするためのさまざまな工夫が近年盛んである。しかしながら、演出側の得意とする視角に拡大鏡をはめ込んでしまい、結果的には意図に反した出来合いが目につく。たとえば、伊那谷そのものが自然博物館といった発想こそ、きわめて重要な視点というべきであり、文献資料のもつ限界性は、他の手法によって提示される、いわば、学術的諸資料の総合によってこそ、その場・その時にどんな状況がそこにあったのか。またそれらの積み重ねとしての歴史的諸事象が、はじめて鮮明に浮かび上がってくるはずである。

近世屋敷跡の発掘事例はきわめて少ないので現状である。諸事情の中でこれが精いっぱい、といった本例が、文化財の扱いや活用をめぐる論議の中で、また、飯田城や城下をめぐる歴史研究の中で、どう位置づけられるのかを見極めていくことは、関係者一同の責務であろうと考えている。

文 献

- 片山 徹「飯田市仲之町近世飯田藩土屋敷跡の考古学的調査」下伊那教育会郷土調査部 昭63
宮沢恒之「武家の年中行事一・二」伊那1970・2月号、同3月号 伊那史学会 昭45
羽生永明「黒須家の系譜」羽生永明資料

伝馬町遺跡

—近世飯田藩武家屋敷跡—

1988年3月

下伊那教育会
飯田市教育委員会

印刷 株式会社 秀文社

図版1



遺跡近景（北より）



遺跡近景（東より）



グリット設定期況



柱礎 2



柱礎 5



柱礎 3



柱礎 6



かまと址



石圓い遺構



集石 1



土塗 1



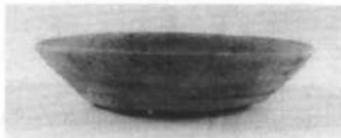
集石 1 底部木製品



春の雪の中の発掘調査



柱礎群出土 灯明皿



柱礎群出土 灯明皿



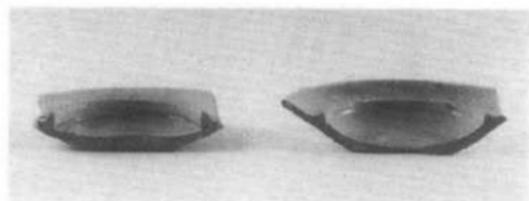
柱礎群出土 壺



かまど址出土 御深井碗



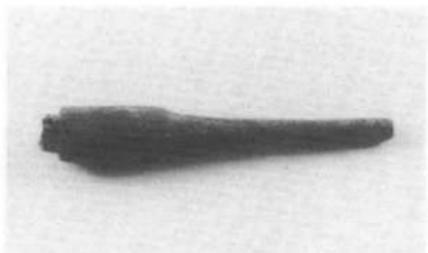
土壌1 出土 淋戸美濃系磁器碗



土壌1 出土 灯明皿



土壌1 出土 青銅製取手



土壌1 出土 キセルの吸い口



造構外出土 伊万里系蓋



造構外出土 古銭

